

SILS Report 2009

KaCL 講演会

第 50 回 講演会

田中 秀和 (University of York)

題目: Fragmentary Negative Concord Items

日時: 2009 年 7 月 21 日 (火曜日) 16:00pm–17:30pm

場所: 神戸大学 人文学研究科 C 棟 3 階大会議室

言語科学研究所主催研究会

ワークショップ

1. Maki Kishida

題目: Lexical Specification of Japanese Anaphors

2. Taisuke Nishigauchi

題目: Point of View and Syntactic Projections

3. Joseph Emonds

題目: Syntactic correlates of the difference between free and bound co-reference

日時: 2009 年 3 月 17 日 (火曜日) 14:00pm–17:30pm

場所: 神戸松蔭女子学院大学 1411 教室 (14 号館 1 階)

コロキアム

Nigel Duffield (University of Sheffield)

題目: Constraints on VP-Ellipsis, grammar or processing?

日時: 2009 年 11 月 6 日 (金曜日) 16:00pm–17:30pm

場所: 神戸松蔭女子学院大学 1421 教室 (14 号館 2 階)

関西言語学会第 34 回大会開催¹

関西言語学会

関西言語学会は、1976年に「大阪（外大）言語学研究会研究発表大会」という名称で第1回大会を行った、当時の大阪外国語大学（現在の大阪大学外国語学部）の大学院生や卒業生を中心とした研究会が発展してできた学会である。初期の大会のプログラムを見ると、1会場で発表・講演が行われ、B4片面にすべてのプログラムがおさまる、小さな学会だった。参加者も関西地方の言語学研究者、大学院生に限られていた。

1979年の第4回大会から現在の「関西言語学会」という名称になり、今年6月に神戸松蔭女子学院大学で行われた大会が第34回大会である。30年余のあいだに学会の規模も大きくなり、今回の第34回大会では3会場でワークショップ、4会場で研究発表を行っている。会員数も名簿にある名前は1,000を超えており、その地域分布も関西以外あるいは外国に居住する人の割合が高く、今回の大会の発表者を見ても関西以外からの参加が半数近くに達しており、今や「関西」という名前が実体を表すものでないほどの学会となっている。

言語科学研究所が事務局に

関西言語学会は関西地方の言語研究がさかんな研究機関が持ち回りで事務局を担当して運営してきているが、2008年から本学言語科学研究所がその指名をうけて事務局となっている。事務局を引き受けて最初に行った仕事はこの学会のウェブサイトを整備することで、学会の大会、機関誌に関する情報を提供している。また、このサイトには第1回から第34回までの大会プログラムを掲載しており、日本の言語学の歴史の一端を示す資料と自負している。意外な(?)名前がちらほら見られるので、言語学以外の方にも楽しんでいただけるかも知れない。下記 URL でご覧いただければと思う。

<http://sils.shoin.ac.jp/KLS/>

新型インフルエンザ

さて、今回の第34回大会であるが、言語科学研究所の少人数スタッフで年初から研究発表の募集、審査に関わる業務など慣れない仕事で何度も立ち止まり、やっとの思いでプログラムを作るところまでこぎつけたというのが実感である。

今年の大会は、ご承知のように新型インフルエンザの影響で、開催校である本学も大会開催の2週間前まで休校措置をとっており、また5月30、31日に西宮市で行われる予定だったある学会は中止になってしまった。関西言語学会大会の1週間前である。

学会ウェブサイトでも大会中止の可能性があり得ることを広報し、その場合に想定される問題などについて学会の委員会と連絡をとりあい、様々なことについて話し合わねばならなかった。特に懇親会を行うかどうか、行うとして食事の内容を変更するか、などはぎりぎりまで問題として残った。

¹神戸松蔭女子学院大学『学報』No. 47 (2009年8月1日) より再掲

発表者の中からも、ある大学では教職員、学生の関西地方への旅行が禁止、旅行を行った場合には1週間の自宅待機を命ぜられるということになり、その大学からの発表者は発表を断念しなければならないかも知れないという事態になった。また別の中部地方の高校教諭の発表者は、生徒と身近に接して教育活動を行わねばならない立場のものとしてインフルエンザ感染の危険をおかして神戸に行くわけにはいかないと発表の棄権を申し出られた。

前者の大学の関西旅行禁止は大会寸前にとかれ、無事発表していただくことができたが、いずれも神戸市の広報でもインフルエンザ問題の終息を伝えていた時期だっただけに、後者の高校教諭の方の無念さを考えると、遠くへ行くほど強まる風評というものに複雑な気持ちを持たざるを得なかった。

いよいよ大会

このように、新型インフルエンザの影響で一時は開催も危ぶまれた大会であったが、一部プログラムの変更があったものの、300人近い参加者を得て、ワークショップ、研究発表、講演、シンポジウム、懇親会、いずれの会場も盛況で、成功であったと言える。

ワークショップは、大学院生や若手研究者による研究発表とディスカッションの場であるが、今大会は3会場いずれも盛況で、私どもの見込み違いのため会場が小さく聴衆が入りきれないところもあった。

参加者が少ないのではないかと心配していた懇親会も多くの出席者をえて、食事の内容も大きく変更することもなく、言語学者が久しぶりの再会を喜び、歓談するひとときとなった。

前日の準備から当日の業務、撤収まで本学の大学院生を中心に近隣の大学の院生にも応援を頼み、何とか乗り切ることができた。院生のみなさんの誠実かつ有能な仕事ぶりはいくら強調してもたりるものではない。

開催校である本学の各部署、特に教務課、学生課、施設管理課、総務課、企画課のみなさんのお助けがなければこの大会はできなかった。食物栄養専攻の先生方・学生のみなさんには教室を変更していただくことになり、この場でお詫びと感謝を申し上げたい。

このように全学で支えていただいた学会、参加者の評判もよく、本学によい印象をもって帰っていただいたと思っている。5号館の東側、大阪湾を見渡す場所に座り、時間を忘れたかのように話しこんでいる参加者の姿が印象的だった。

西垣内 泰介